

かった(広島・岡山両県には多くいるようである)。産地から見て海岸線沿に分布している種類のようなものである。このことは岡山, 広島両県でも同じような傾向にあるようである。オオシロカミキリと同じ様に日本海側の香住という記録がある。日本海側の調査の要がおいにある。

1979年三木市内で得られた材から羽化した本種6exs., を三木 進氏から見せて頂いた(内1♂恵与さる)。他にも5exs. 程羽化したと。さらに三木市の小倉 滋氏宅を訪問、全しく三木市内で採取されたノグルミを見せて頂いたが(1979年6月23日)。多数の本種が羽化しており勝手に逃げてゆくものもあつたが小倉氏も余り標本にしてもと2~30exs. 位を標本にしておられるようであり、筆者も同氏の御好意で生きた12exs. を頂いた。とにかくこの様に多くの本種が僅か数本のノグルミから羽化するのに野外での採集ではなかなか困難である。余談ではあるが当日同じく三木市内採取の材より羽化採集されたチャイロホソヒラタカミキリを10数頭見せて頂き内1ex. 御恵与頂いた(6月1日採集)。本種も今迄県下での産が余り知られていなかった種である。

一応兵庫県下の記録を全部記しておく。

津名郡津名町大町〔堀田, 1971〕。三原郡諭鶴羽山〔久松, 1974〕。洲本市下加茂, 先山〔堀田, 1979〕。芦屋市〔巖〕。神戸市布引〔柴内〕。鳥原(1♂, 20-VII-1939, 2♂, 2♀, 11-VII-1941)。高取山〔増田, 1939。鳥居, 1962〕。三木市福井〔三木, 1978〕。三木市内(1♂, 3-VI-1979, S. Miki leg., 13exs., 23-VI-1979, S. Ogura leg.)。加西市畑(3♂, 17-VI-1974)。多紀郡円南町竜蔵寺町〔辻, 1964〕。水上郡神楽〔山本, 1958〕。城崎郡香住〔新しい昆虫採集, 下, 1959〕。宍粟郡波賀町赤西〔4exs., 22-VII-1979, Miki & Hatanaka leg.〕

本種の幼期, 生態に就いては黒田裕一氏(昆虫学評論, Vol. V, No. 1: 41-46, 1950)。中村慎吾氏(ニューエントモロヂスト, Vol. IV, No. 1/2: 38-44, 1959., げんせい, Vol. IV, No. 1/2: 54-55, 1957)。小島圭三・岡部正明“日本産カミキリムシ食樹総覧”(1960)の夫々貴重な報文がある。

香川県小豆島(小豆郡池田町)においてもシイタケ栽培に使用されているノグルミのほだ木にひどい害を与えていることを報告されている(げんせい, 18: 5-8, 1968. 21: 8, 12, 1970)。

本種の分布は台湾から北へ南西諸島(種子島, 屋久島, 奄美大島, 徳之島)。四国, 九州, 対馬, 隠岐島, 本州となっているが、本州では飛騨地方, 大阪府, 兵

庫県, 岡山県, 広島県下となっている(新しい昆虫採集, 下, 1959, P. 430. 但し本書では*O. octopustulatus*の亜種として本種を扱っている)。(12-X-1980)

(S. 45: TOSHIRO TAKAHASHI

神戸市

(付記)

オオシロカミキリの兵庫県下で採集された一番古いのは小林桂三氏採集の六甲の小林氏自宅のベランダの燈火に來たものであるが文献上での記録の一番古いものは関氏の報文であるとしたが之は誤りで文献上での記録も小林桂三(賢三)氏の報文“大阪附近の天牛”の中で記録しておられる方が古い(関西昆虫学会々報, No. 3, p. 77, 1932), 従って名実共に本種の県下で一番古い記録は小林桂三氏採集のものである。

またタカサゴシロカミキリの近畿、中国地方日本海側の記録として兵庫県の例ではないが島根県日御崎で本種を数頭得たという記録がある(藤村俊彦, 新昆虫, 10巻, 5号, p. 21, 1957)。

9月に羽化したツマキチョウ

広畑 政己

本種の飼育個体の中に、頻度は極めて少ないが、翌春羽化せずに、翌々春に羽化する個体のあることが報告されているが、この度羽化したものは越冬をしないうでその年の9月に羽化したものである。

この個体は、1980年4月26日に兵庫県神崎郡福崎町の市川堤防に生えていたハクサンハタザオに産卵されていたもので、イヌガラシで飼育をし、蛹化したものである。

蛹化後すぐ冷蔵庫に入れ、8月下旬までそのままの状態で保管していたが、低温期が約3ヶ月あったので、秋に羽化するかもしれないと考え、8月下旬に冷蔵庫から出して室内に置いていたところ、9月23日に♂が羽化した。

個体は後翅が完全に伸びなかった程度で、斑紋などは普通の個体との差異はない。

種を存続させるには、幼虫が日長や温度などの外的要因をまちがいに読み取り、最も適切な時期に羽化しなければならないわけであるが、本種の場合は、何ヶ月かの低温期を経過し、その後羽化に必要な温度が得られれば羽化するというメカニズムが組み立てられているように思える。しかし、低温処理したのは1例でもあり、この推測は間違っているかもしれない。

いずれにしても秋に羽化した例は珍しいと思われるので報告する。

(S28: MASAMI HIROHATA 姫路市)